



岡山県恩原高原 1993.7.13 / 撮影：鳥越康教

選定理由：生息地，個体数ともに激減，絶滅のおそれが高い。

形態と生態：前翅長20-26mm。一見ヒョウモンチョウ類に似るが，小型で飛び方も異なる。成虫は6月下旬より7月にかけて発生し，草原上や草間を低くゆるやかに飛び，オカトラノオなどの花で吸蜜する。幼虫の食草はオミナエシとカノコソウで，その根元近くの葉裏に卵塊として産卵される。夏，秋は幼虫は群行動し，枯葉等を利用した巣をつくって越冬。越冬後，食草の芽生えに伴って活動を開始する。1960年代までは岩美町から日南町まで県境脊梁山地沿いに連続的に分布していたが，その後しだいに生息地が減少し，1980年代後半から急減して，大山周辺などの著名な生息地のほとんどが失われてしまった。

分布(県内)：生息地は佐治村，三朝町，江府町に各1箇所。いずれも規模は小さく，減少傾向。

分布(県外)：兵庫県生野町以西，島根県三瓶山までの中国山地(岡山，広島県東部を含む)；アジア大陸北部～朝鮮半島。しかし，すでに広島県では絶滅し，国内全体で確実な生息地は10カ所にみえない。

生息環境：食草の生育地でもあるススキの優占する草原。県内での垂直分布は標高400-1000mであり，600-800mが中

ウスイロヒョウモンモドキ

1990年以後
1970-1989年
1969年まで



心。現在，本種の生息地は激減したが，その原因の大部分は農業生産様式の変化により，採草地確保を目的とした“山焼き”などの人為が加えられなくなり，植生の変化(遷移)が急速に進行し，ササ原や低木林に変化したためである。

保護上の留意点：わずかに現存する生息地では現在も遷移は進行中で，放置すれば遠からず生息不適地となることが予想される。また，飛翔がゆるやかで採集がたやすいこと，生息範囲が狭いことにより，採集圧もかかりやすい。そのため県内の1，2の生息地について，早急に定期的な草刈りの実施と採集禁止処置をとることが望ましい。これらの実施については生息地の草原が比較的まとまった環境であること，草原のため，監視等が行いやすい等の好条件がある。

文献：

竹内 亮(1993)ウスイロヒョウモンモドキ. pp. 176-177. In: 鳥取県のすぐれた自然(動物).

淀江賢一郎(編)(2000)検討会討議資料集 ウスイロヒョウモンモドキの衰亡と保護 激減する草原性チョウ類の保護をめざして (財)ホシザキグリーン財団, 94 pp.

執筆：小林一彦